

公開シンポジウム

震災遺族－支援される立場、支援する立場、その両者から

The Earthquake Disaster Bereaved

袴田 俊英 Shunei Hakamata (秋田ふきのとう県民運動実行委員会)

キーワード：グリーフケア、被災地、自死遺族

key words : grief care, earthquake disaster, suicide bereaved

2011年3月11日の大震災はすでに過去のことのよう
に扱う人びとが現れている。被災地から離れた地では、
ニュースに取り上げられる回数もめっきり減少して
いる。しかし、震災による犠牲者の家族は「震災遺
族」と呼ばれるようになり、いまだに精神的痛みをか
かえながら日々を生活している。第14回日本赤十字看護
学会の公開シンポジウムは「遺族支援－支援される立
場、支援する立場、その両方から」と題し、改めてこ
の震災と向き合うという意味を持ちながら開催された
ものと諒解している。

シンポジストは岩手医科大学の大塚耕太郎先生、つく
ば国際大学の高橋聡美先生、そして復元納棺師の笹原
留以子先生の三氏である。大塚先生は震災直後から現
地に入り、支援活動を展開した経験から、遺族の具体
例を挙げてその心理的回復に益する論点を挙げていた
だいた。高橋先生はDMORT（災害死亡者家族支援チ
ーム）による活動と、遺児に対する支援について考察
していただいた。笹原先生は傷ついた遺体を復元する
ことで、遺族の悲嘆と苦しみを癒すことに走り回っ
ている当時の状況を語るとともに、高橋先生同様、遺
児の支援に努めている現在の活動を報告していただいた。

支援者は時として支援される側を弱者として扱うこ
とがある。シンポジストの3名はいずれも被災地に深
い関係を持っている先生方である。支援する・される
という立場の違いを超えて、さらには被災者とともに
痛みを共有しながら、震災の直後から支援に関わっ
てきている。

ことに、復元納棺師という立場だった笹原先生は、
まさに直後からの活動を余儀なくされた。しかも5か
月間はボランティアでの活動であったという。幼い子

供の遺体を復元したエピソードは会場の涙を誘い、遺
体を復元することの意味は、遺族にとって最初のグ
リーフケアとなることが確認された。

高橋先生はチームとしてグリーフケアを、震災当初
から展開してきた。僧侶である筆者にも関係すること
だが、遺族にとって葬送儀礼もまた悲嘆を乗り越える
大きな力となっていることを、この震災によって再認
識させられた。高橋先生が所属するチームには宗教家
も加わっている。これまでそれぞれの立場で進められ
てきたグリーフケアの取り組みが、仙台で一つにまと
まったことによって相乗効果が生まれているようであ
る。

大塚先生はこれまで長く自死対策に関わり、岩手県
内各地に民間団体を立ち上げる原動力となってきた。
ことに岩手県では被災した沿岸部に自死予防に関わる
民間団体が多い。先生自身の自死遺族ケアの経験と、
民間団体の協力で震災遺族に寄り添う活動を展開して
いる。突然、家族を失うという悲嘆が自死と重なると
いうことは、日常の活動である自死遺族ケアの方法
が、突発的な事象である自然災害による遺族のケアに
適用できるということが改めて理解できた。

このシンポジウムでは、日本人の死をめぐる文化に
ついての示唆をいただいたと感じた。日本人は死者と
共に生きているという面を持っている。だからこそ、
一定の手順を経て先祖となり、その存在が安定する。
その手順が取られていない状態は、遺族にとっては強
い悲嘆となる。この度のような、突然のそして未曾有
の災害の場合、通常の手順を踏めない遺族が多く、だ
からこそ支える人々が必要となる。

考えてみれば私たちは必ず遺族となり、また必ず死

者となる。現在支援する立場にいる者も、将来必ず支援される立場となる。さらに言えば、震災で生き残った者をサバイバーと言うそうだが、現在生きている私たちはある意味で全員サバイバーであるといえる。そこに支える側も支えられる側もない。死者が安定した時、私たちは初めて死者と共に生きることができるとすれば震災遺族への支援は、被災地の精神共同体の復興であるといえるのだろう。